

随想 西行遍歴歌

上村敦之

一

鳥羽院に下北面の武士として仕えた青年佐藤義清が、失恋か政争かその因はわからぬものの、二十三才にして突如出家遁世した。以下、彼は、半世紀にわたって、高野・平泉・四国などを聖僧として遍歴の旅を続けるが、ここでは、その足跡に沿って、思うままに選んだ二十首について自由に感想をまとめてみた。

(1)の歌

吉野山こずえの花を見し日より
心は身にもそはずなりにき (春)

吉野山を遠望して梢の桜樹を見ての作である。語法的には、「…より…(に)なる」つまり、起点と結果という明快な語法である。身より心があくがれ出るといふ心情は、激しい自然探訪へのうづきであろう。「見し・身にも・にき」というナ・マ行音の多用もその旅情の深切さを高めている。

(2)の歌

花にそむ心のいかで残りけむ捨
て果ててきと思ふ我身に (春)

まず韻律上、第四句の「て・て・と」の「」音の重層感がすばらしい。桜花への執着、その美への妄執がすべての煩惱をこえたはずのわが身に更に残る、そうした自己発見への驚嘆がいとおいしく想い起されている。

(3)の歌

ほとけには桜の花をたてまつれ
我が後の世を人とぶらはば (春)

四十才壮年期の作か。「ほとけ」と「後の世」が連動し、西行自身の成仏後の影像が志向されている。「たてまつれ」は謙語だが、自己を客観化していて面白い。一三句と四・五句の倒置は典型的だが、生涯、月・旅そして花を愛し続けた歌人だけに、「桜の花を(供えてほしい)」との望みは、もっともな切望といえよう。

(4)の歌

ねがはくは花のしたにて春死な
ん そのきさらぎの望月の頃 (春)

これも中年の四十代の作らしい。

まず、「願はくは」という謙虚な願望に心打たれる。それにしても、まことに一風変わった表現を持つ。「花のした、きさらぎの、もちづきの」と連体格「の」の三連対は、読者の心を大きく揺る。しかも、時は春二月の桜の万開時、しかも夜、望月がその紅粧をいろどる。その頃に、釈迦の入滅に日を併せて死ななという。月・花の上に死を奏でんとした遊樂僧西行の面目がいかにも羅如とした秀歌である。以上四首を、起の編とする。

二

(5)の歌

おほかたの露には何のなるなら
ん 袂におくは涙なりけり (秋)

構図から入る。おほかたの(野づら一面におく)露には―何が
なったのか。それに対して、恋に破れた袂に宿ったのは―(ほか
ならぬ)わが涙であるとする。叙景で叙情の対置・触合が早事に

「一首に形象されている。前句の「なるならん」という独白調、後句の「
…なりけり」という詠嘆をこめた確認の調べも注目したいところである。

(6)の歌

さらぬだにうかれてものを思ふ
身の心をさそふ秋の夜の月 (秋)

自分の性情を西行はこう告白する。ただでさえ、心が浮遊し、
放浪の衝動しきり、その自分を更に秋の夜の月が、愁いの闇に、

悲しみのまどいへと自分をいざなう。

僧体の浅慮の反省か、余りにも美しい自然美への哀訴か、いず
れにしても、二律の背反に苦しむ生身(しょうじん)を赤裸々に
開陳する姿はわれわれを打つ。

(7)の歌

捨てて去にし憂世に月のすまで
あれなさらば心の留らざらまし (秋)

出家直後の作という。財力・美ぼうに恵まれた二十三才の佐藤
義清は、一躍、悟道の達人に身を変じたわけではなかった。この
歌にも「捨てて去った」「憂き世」「留まる心」と綿々たる俗世
への未練が渦巻いている。この時の西行には、浮世への執着が色
濃く残っている。それ故、名月よ牙え渡るなかれという、月は、
彼にとって宗教的イデーであり、花は芸術的イデーだといわれる
が、この歌ではその月こそ、浮き世を最も慕わしく想起させる媒
介なのであった。

(8)の歌

虫の音をよわりゆくかと聞くか
らに心に秋の日数をぞ経る (秋)

宇宙の心音に耳澄ます詩人の本領がこの歌にはある。陰曆七・
八・九の秋の日々を来る日も来る日も作者はきりぎりすやこおろ
ぎの鳴き声と共に過ごしてきた。だが、長月も二十日過ぎの今日

この頃、その数はへり、めつきり声音も弱くなってきた。自分にとつての今年の秋の日々は、思えばこの虫たちと共にあったのだ、そのまさと絶えんとする今、自分の生命のあり方を虫の生命と等置して思い置っている。

(9)の歌

山里はしぐれしころの淋しさに

風の音はややまさりけり (冬)

昔、山岳部顧問に就任時、類似の体験があった。

山中―薄明―時雨ばらつく杉林の中で、次第につのりいく嵐の音を聞いた。この幽暗の林間で夜を迎えるのかとの寂寥感と雨滴の音以外に静寂さが深く心をおおった。その追体験をもってこの歌の評に代える。

(10)の歌

わりなしや氷る笥の水ゆえに思

ひ捨ててし春の待たるる (冬)

遁世時、つまり二十三才の冬か。離俗の道は広き門にあらず、それは苦惱と憂愁に彩られた冬の季節であった。

「わりなしや」、せんないことだ、わり切りたいが、道理の弁別にもとるとする初句の詠嘆にまず注意しよう。

竹を割って連ねた笥の水、それはすべなく氷り切ってしまった。春来れば開花を待ち、花咲かば風情を惜しんで散るをいとおた慕わしい俗世ノええまよ、その浮世に未練を持つまいと一旦は

契つた自分、その自分が、笥の水が解けぬ限り春は来ぬ、早くこの結水を解かして春が……といふ浮世人なみに春を待たんとする。

人間の弱さ、修行の優柔さ……それらを断ずる前に、人間的なあまりに人間的な苦行僧西行の風ほうをこの歌に見て、”承”の編六首の結びとする。

三

(11)の歌

待たれつる入相の麤の音すなり

明日もやあらば聞かんとすらん (雑)

リズムの澄澄さは、歌柄の余情をも支配する。

下句の「……あらば」「……すらん」のひびき、上句の「……れつる」

「……すなり」のハーモニーが、全体を墨一色の気品ある歌調に染め上げている。

今宵一夜、あの晩鐘の音が聞けるか、……ああかすかに聞えてきた……明日までわが命保てば、又明日も……と、わが魂の延引をひそかに希うのである。この歌にモンテーニュの随想録の小節を想起するのは、筆者のみではあるまい。

(12)の歌

鶉伏す刈田のひつち生ひ出でて

ほのかに照らす三日月の影 (雑)

新古今のあまたの歌との相関を連想さす歌だが、カラフルな春

色にあふれている。

刈田の地面にそれと目立たぬ茶色っぽい鶉も餌をあさる。刈株からうす青いひこばえがわずかに延びる。それを照らす三日月の月明もほのかである。荒廃と生存、無相と有相の混在した純叙景の秀歌である。

(13)の歌

白川の関屋を月の洩る影は人の
心を留むるなりけり

(雑)

二十六才頃の第一回奥州紀行の歌とされる。もる(洩る—守る)の掛詞、「留むる」の「関」との縁語など知的技巧に伴う修辭が目立ち、後年の同旅行の秀歌「年たけて…」などの品位に乏しい。彼の理想の歌境が、「対象詠法でなく、対象に迫る自己の心の映像」とされるが、そうした片鱗はこの歌にはない。

荒廃した無人の関を月が守る—人心を、名歌吟に思わず足を留めさせず：そうした言葉の表面にある感懐が、かえって読者の共鳴を損なうといった若年ゆえの技術不足をよみとつてもよい。

(14)の歌

取り分きて心もしみて呀えぞ渡
る衣川見に来たる今日しも

(雑)

二十五才の作とされる。

衣川に西行は何を見たのか。サスペンスもどきの興味をよぶが、義経滞在期ともダブリ、奥州藤原一族の繁栄、更に前九年の役

の舞台など、歴史的景物(スペクタクル)は多かつたにちがいない。

下句の「…しも」に典型される詠嘆調もやや生硬だし、その他、「凍み—染み」「衣…着たる」「河…渡たる」など修辭遊びの傾向が散見されると思う。それにしても、「取りわきて—ぞ…渡る、—来たる…しも」の接点に多く徴される、男性的量感がこの歌を文(たけ)高い印象深い作としている。

(15)の歌

ここをまた我住み憂くて浮かれ
なば松は独りにならんとすらん

(雑)

五十代前半の作か。讃岐で崇徳院の跡地、普通寺の弘法大師遺跡などを経て、その傍に草庵を作り、更に土佐行脚を思い立って(これは果さず)作つたとされる作である。

西行にとって旅とは何であったか。芭蕉の場合と同様、余りにもロマン的に過ぎるとらえ方も現実をとらえてないが、聖僧(ひじりそう)としての仏道行脚だったことのほかに、月・花さらに断ちがたい人間性を求めての精神彷徨だったことも事実であろう。「庵並べん 冬の山里」と別の歌に読んだこの歌人は、生得の孤愁をいとう隣人愛の歌人だったともいえよう。「松はひとりに…」には、人間愛の極致に近い心情がたただよう。

「ここをまた」、今までも再三再四、しばらくの交流、数年の逗留でのいつくしみ合いも不本意に終つたが、又又今回もといっ

た深い嘆息が聞えてくる。更に、「うかれ(いづ)る心」は、彼の本性とでもいうべき用語だが、出家僧としての自卑・自嘲のひびきが痛ましくもっているように思えてならない。自己の弱点を知る者こそ、十全のヒューマニスタリウるということばをこの歌の注解のヒントに付しておく。

(16)の歌

伏見過ぎぬ岡の屋になほ止(とど)まらじ
日野まで行きて駒試みん (雑)

出家前の、二十才過ぎの眉目秀麗のものゝ西行の騎馬行とされるが、その疾走感覚、スピード感は一読してまことに快く、私の好きな歌の一つである。伏見―宇治の岡の屋(ええ、ここで思案したが)―日野(まで思い切つて疾駆しよう。)今度求めたこの駒、なかなか元氣だ、騎乗試しにはもつてこい。「過ぎぬ、止まらじ、行きて、試みん」傍点の助辞に留意されたい。その律動感、その青年武者の吐く呼吸、山家集中に珍しい流動感溢るる秀句と評して、以上六首の「転」の編を結ぶことにする。

四

(17)の歌

知らざりき雲居のよそに見し月のか
げを袂に宿すべしとは (恋)

主題は秘恋に属そう。天井はるかかなたで無縁の世界で輝いていた月光。なんとそれが、実らぬ恋のために袂をしとどにぬらし

てしまったわが涙に影を映していたとは……というのだ。結局の「とは」が初五に応じている。

この歌、題歌歌らしく、後年、例の百人一首にも入っている「なげけとて月やはものを」と組み合わせられている秀歌である。

(18)の歌

数ならぬ心の咎になし果てじ知らせてこそは身をもうらみめ (恋)

これは、又まことに屈折した恋情の表白であろう。まず、我を数ならぬ身と規定する。つまり、高貴な女性に類似せぬ身とする。そして、及ばぬ恋とは思いつつも、懸想なしにあきらめ、恋情自体をわが罪とはすまいという。次に、恋情を相手に思い切つてぶつつけよう、で、最後に、それが屈かぬ恋に終れば、嘲笑されようと、わが身の不運とあきらめようというのである。

ここには、身分違いの相手への恋を、はじめから、下賤身の及ばぬ恋とはせず、懸想の心情を相手にぶつけ、まともな対応を得られねばあきらめようという、自主的積極的な恋の姿勢がある。下句の係り詞の使用も大胆である。

(19)の歌

あはれあはれこの世はよしやさもあらばあれ
来む世もかくや苦しかるべき (恋)

まず上の句。初句は恋の呻吟への嘆声である。更に、接続詞「よしや」、又、「あらばあれ」の放任形、など、歌語の諧調をこ

わしての、恋の痛苦への受容が前半であろう。

下句の「かくや」の「や」を反語に取るか、疑問乃至詠嘆に取るかで、後半の世界が決定する。諸資料によると、安易な反語には取りがたく、来世も恋の苦業より逃れがたいが、現世のそれは地獄の責め苦しむを思わせる。シンイ(淡いかり)のほむらを覚悟せねばならぬとする。遁世の僧が、かかる人間性の悲しさを三十一文字に詠んでいる姿に、西行歌の位相の奥深さを思うのである。

(20)の歌

逢ふと見しその夜の夢の覚めであれな

長き眠りは憂かるべけれど (雑)

上句は、まさに新古今の妖艶の色調であろう。恋しい人と契ると見た夢、その夢はとはに覚めないでくれという。

下句は、仏法にいう「長夜の眠り」をよみこんでいる。いつまでも悟りえない惰眠がこれで、理非の分かぬ境界に迷いこんでいては出家として申し訳けないという。

全体に、仏法の背理への自省とわが本能に伏し恋の燃焼への甘いいざないとの葛藤である。

かくして、恋の歌中心の四首をもって、結の編も終わり、すべて二十首に及ぶ西行遍歴歌のアンソロジーも一応終結したが、四季・恋・雑の歌すべてを通じて、今より八百年前、中世動乱期を生きた西行―義清の、自然・旅情・恋愛・信仰などの踏綜した、和歌に形象された人生への発問は、時代と共にいよいよ大きく、

いよいよ高らかに現代人の耳朵を打ち続けているといえる。

西行の、陸奥・四国への遍歴は、彼の人生道程の深化の半世紀であり、われわれも又、各自の人生の角角で、数多の西行の歌に耳傾けていきたいと思う。

(S五七・七・二三 記)

研究室受贈図書雑誌目録Ⅳ

国文学論集 第二十集(山梨大学)

国文学論叢 第二十七集(竜谷大学)

国文学論考 第十八号(都留文科大)

国文科論集 第四号(佐賀竜谷短期大)

国文論叢 第九号(神戸大)

国文研究 第六号(香川大)

国文研究 第三十一号(愛媛国語国文学会)

国文研究と教育 第五号(奈良教育大)

国文白百合 第十三号(白百合女子大)

国立国語研究所年報 32

古代研究 第十四号(早稲田古代研究会)

古典研究 第九号(ノートルダム清心女子大)

語文 第三十九輯(大阪大)